

大府 通水前後の水使い

愛知用水を畑作灌漑に活用し、農業に一大改革をもたらした輝かしい歴史。
この記憶と豊かな実りの地を次世代に引き継ぐことが課題になっています。



伴 武量

ばん たけかず
元・愛知用水土地改良区理事長

1926年、愛知県大府市生まれ。1980年愛知用水土地改良区理事、1996年同・副理事長、2000年から2008年同・理事長。2008年国土交通大臣から水資源功績者表彰を受賞。



血気盛んな農村青年

久野庄太郎さんと浜島辰雄さんに続いて活動したのは、半田農学校（1886年（明治19）農業講習所として開所）出身の人たちでした。

農学校教育が影響しているというよりはね、久野さんが愛知用水問題を取り上げたときに、ついていったのが各農村の血気盛んなリーダー的存在だった人たちということです。農村同志会のリーダー格になった年代層に、たまたま半田農学校出身の人が多かった。

戦後の食料難の時代に、農村青年が団結して食料増産をやらなければいけない、という気運が盛り上がってくる一方で、政治混乱の時代でもあった。いわゆる農村奴隷みたいな状況から解放しなければいけないということで、各地域の農村青年がカッカと燃えた。

もちろん、そういう人ばかりじゃありませんよ。農協の前身の農業会の指導者たちが、そういう若手を取り込んで政治軍団みたいな組織をつくり上げたのが、農村同志会だったんです。

この地域はね、戦後の農地解放以前からほとんどが自作農。土地が少ない人にたくさん持っている人が貸すとか、土地が多すぎて自分で耕作しきれない地主が人に貸

すとかいう程度の地主さんしかいませんでした。

農地解放
第二次世界大戦後の1947年から3年間で、GHQ（連合国軍総司令部）の指令で行なわれた農地改革。政府が不在地主や一定以上の農地を保有する在地主の農地を買い上げ、小作人に売り渡した。併せて、小作料の物納禁止を行なった。

だから普通にいわれる農地解放の影響と、この辺りでの実際は違っていました。ご覧のとおり、この辺りは田んぼが少ないんですね。谷あいには、細長くあるぐらい。三河や尾張のように田んぼがたくさんあって、それを地主さんが持っているという風ではない。

大正の末か昭和の初めだと思えますけれど、ご領地の払い下げというのがあった。この辺りは国のご領地ばかりだったんですよ。田んぼは無理ですから、畑に開墾した。それで畑作が盛んになっていった地域です。大府でも南のほうはほとんど、そうなんです。

畑作の中でも大根は比較的水がなくてもできたから、沢庵漬けの産地にもなった。戦時中にだんだん食料がなくなっていくところは、大府の大根というのは大変貴重なもので、京浜、京阪神へも大根列車でどんどん運んだものです。それと、スイカ。スイカというのは日照り草。日照りが続くトスイカは良くなる。それともう一つ、

テンコ豆という豆があつてね。金時大豆ともいったもんですけれど。

夢が夢でなくなる期待

これは何度もみなさんに言ってきたことだけれど、知多の人たちの思いは同じ。木曾川の水がきたらいいな、そんな中で久野庄さんの提言。飛びつきたいような思ひだつた。それでもみんなの世間話の中では「また、久野庄サが大きなことを言うておつたぞ」と。

「久野庄が何を言つたつて、御嶽山の水がくるものか」と。

「そんなものがきたつて、頭の上にギツチョコがにやあとるわ」と。ギツチョコというのはバツタのこと、当時は土葬だったから死んだ人の墓の花筒にバツタがとまつて鳴いとるわ、という揶揄です。

こういう風に言われるくらい、画期的な話であるが、なかなか信用されない話でもあつた。

だけれども、くるもんなら欲しいという願ひはあつた。だからその話がだんだん真剣味を帯びてきて、いよいよ久野庄サと浜島辰っさんが知多半島の、本当に隅々まで説明会をやられたんだけど、浪曲師の梅枝鶯を呼んだときには「今日は久野庄サが来て、愛知用水の話をしてくれるから、みんな、がつつり集まつてくれよ」と。

私は青年部長をやつておつたんですけれども、青年同志会の我々の年代が誘致の役を買つたのです。

愛知用水公団（現・水資源機構）がつくつた映画で、みんなが背広を来ているのは撮影だからです。大広間でみんなが地図を見ているシーンがあるようですが、このときには浜島さんが書いた地図はまだなかつたな。

また、久野庄サというのは話のうまい人だな。あんまり雄弁ではないが、講演会でも「なあ、おめえさん、そんなこと言うつたらあかんぞ」という話し方だもんで、親しみやすい話をされた。それに対して浜島先生の話は、もともと学のある人だから、学問的な裏づけのある話をされるので。用水には金がかかるだろうなあ、と思つたのを覚えていきますよ。

畑地灌漑のための土地改良

愛知用水を溜め池に入れるのは、曲がりなりにもそれまでのルールがありますから問題ない。100%有効に使えた。ところが畑地灌漑なんていう経験は、まったくないわけですから、試行錯誤、失敗の連続。

スプリングラーというのは4本立てると1反歩かかる、といわれているが、円形に水を撒くから、

どうやつたつて重なつてたくさんかかる所もあれば少なくなかる所もある。しかもその水が他所の畑までかかつていつたらいかんもんで頭が痛い。通水直後は区画整理ができていないから、うちの畑に半分と他所の畑に半分かかつてしまふ。三角形の畑もあつたしね。

だからとにかく農地改良の必然性が認識されてきて、それじゃあやろうじゃないか、ということになつた。しかし、みんながそういう一致団結した気持ちになるまで、この集会場に集まつて、夜が開けた日が何回あつたか。「そう言わずにやろうや」と言つたつて、翌朝になると「やつぱり、わしゃあなあ」と何度も迷つて。

それは無理もないことだ。工事費がいくらかかるかわからん。その上、ホースを買つてスプリングラーを買つて、という投資になるから、なかなかいつべんにはいかなかつたですよ、当時は。

でも先進的に取り組んだ人たちが「こんな良いものはない」と言うもんだから、一人やつて二人やつて、で増えていった。それで土地改良区と初めて相談をして、畑作灌漑ができる施設を備えた27町歩の土地改良をした。愛知用水土地改良区の第一号ですよ。通水と同時に区画整理、区画整理とともに管設備ができたり、

U字溝の排水路もできた。徐々に土地改良が進んで、畑地でも100%有効利用ができるようになってたということですよ。

「アメリカでは傾斜地の上からダートと水を流すと、調子がいいらしい」なんていう話もあつた。畝間灌漑といつて、畝の間に水を入れていくように、と指導されたんですよ。ところが、実際にやつてみたら、そんなのできっこない。

僕もやつたことがあるんだけど、例えば大根が植わっている所の畝間にね、水を流すと畑が縮まつちやう。

水がダートと流れていくとダメ。雨と同じように散水すると全体にふわつと水がかかるから、やはりスプリングラーなどの散水灌漑しかうまくいかないんです。

通水前の思い出

私は昭和元年生まれだから、数え年と昭和の年が同じなんですよ。だから、愛知用水がきたときは、36歳。

16歳で高等小学校を卒業し、そのときから百姓をやつてきた。戦中、戦後の食料難や水に苦しんだ世代です。1944年（昭和19）の大旱魃も1947年（昭和22）の大旱魃も、みんな経験してきているわけですよ。

この写真（26ページ）は駐留軍（連合軍総司令部）が撮影したものです。たまたまお寺さんにあつたから、拡大コピーさせてもらった。

赤く塗つてあるのが、私の地所です。なんでうちがこれほどの地所を持つておれたかという、池ですよ。この池へ水を溜めなけりゃいけない。水を溜めるためには流域がたくさんいる。この周辺は、当時、御料林だった。親父が若いときに、池に水を溜めるのに必要な流域を得るために、国から払い下げを受けた。

この地域は、まつたくのお天水でね。つまり降つた雨が池に入つて、その水があるうちは管理をして使ひ、なくなれば万歳だ、という地域なんだからね。

この中に私のところでは三つ池を持つておつた。こういう小さい池は、土地改良でみんななくなりましたよ。

黒く見えるのが山林で、土地が高い。そして傾斜になつている。だからこの水を何が何でもうちの池に入れなくてはいけないから、この道路の側溝の水を水路で採つてこつちを持つてきた。だから、ここに降つた水は一滴も漏らさんように池に入れた。

普通は夕立が降るとうちの中に飛び込んで隠れているもんだが、知多半島の人間は夕立が降つてき

戦後すぐに駐留軍（連合国軍総司令部）が撮影した航空写真。左の写真で中央に黒く見えるのが森。これだけの面積の土地でも、水源涵養のために森が大切にされていたという。伴さんはまた、「溜め池の流域」という言葉も使われていた。

左は愛知用水取水口の表裏。大きい写真が木曾川の対岸から見たもので小さいほうは陸側から見たもの。

写真提供：（独）水資源機構愛知用水総合管理所
下：谷で見かける小さな溜め池。



たら蓑笠をつけて表に飛び出して行って水路を回らにやいかん。普段水がない水路だから、モグラの穴がいっぱい開いているんです。そこに水が漏らないように、足でどンドン踏み固める。この水路のことを「ヤトイ」というんですが、親父に「ヤトイ」を見回ってこい」とよく言われた。

秋の台風の水をまず池へ溜めるということ、これは一生懸命だったんです。その水で一冬越すんだから。水はどンドン減っていくんだけど、少しずつつないでいて梅雨の時期までしのご。谷になつていような低地にはまだかろうじて水が残っているんですが、両脇の少し高くなった所はみんな旱魃でやられてしまふ。ヨリデが上がる」というんだが、枯れていくんですね。

水の奪い合いにもなりますよ。うちの「ヤトイ」から水が漏れると、すぐ下の水路で受けて隣の人の池に入るようになっていた。これは笑い話だけれど、躍り込みといて、水が干上がった池の魚捕りをする。それを何月何日の何時、というふうにお触れが回ってくるんだね。水がなくなつただから、悲しいことなんだけれど、そんな中でも村の楽しいお祭りだった。

ここには四つの大きな村池があるんです。それが全部が全部、涸れるということはない。一つぐらいは残ったもんですけど、早いか遅いかの違いはあっても、たいていは四つとも躍り込みがあつたね。村中の男たちが魚捕りに夢中になつての競い合い、厳しさの中の楽しいひとときでした。半月集落の財産には、ほとんど「花井宗兵衛ほか、53名」と書かれている。名義を変えるには、53軒の子孫を捜して全員に判子をもらわないと変えられないのです。10年ほど前に「このまま放つておいたらいかん」ということで、日本中を捜して今の名義に変えたけれどもね。

池の水を大事に使うということに関しては、5月8日までは池の栓を抜いてはいけない、という決まりだった。5月8日がきても雨がなくて、苗代田に水がないときは、苗代の田んぼにだけは水を引いてもいいよ、という取り決めがあつた。まあ、これは不文律だけれど、互いの目が光っているから、これを破って自分の田んぼに水を引こう、という者はおりませんでしたね。

私どもは「ちゅう」と言っておりましたが、「ちゅう」がくれば池の栓を抜いてもいい、ということになつてた。半夏生（はんげしょう）というものが、田植えが終わって一休みする時期です。旧暦だと1カ月前には遅くなるので、「ちゅう」というのは、多分夏至のことだと思えます。

中伏（ちゅうふく）
夏の極暑の期間を三伏（さんぷく）といい、夏至後の3番目の庚（かのえ）の日を初伏（ひよふく）、夏至後の4番目の庚（かのえ）の日を中伏（ちゅうふく）、立秋後の最初の庚（かのえ）の日を末伏（まつぷく）ということに因むと思われ。

半夏生（はんげしょう）
夏至から数えて11日目の日。7月2日のことが多い。

うちは田んぼが少なかったもんですから、親父が刈谷との境界の境川の端、東浦町の三州道（さんしゅうみち）という所に田んぼを2反5畝（うね）買って、ここから1里半ぐらいあつたな、そこまで牛車で通つたんです。

境川は一番土地が低い所です。そこがダメになつたら、もう本当にひどい旱魃（かんげつ）ということです。それでも当時手に入るような土地です。そんなには恵まれたところじゃない。

そこに5畝（せ）、5aぐらいの池があつた。まあ、池というようなものじゃなく、水溜まりだねえ。それが田んぼの水面より低いんですよ。それでも、かなりの量の水が溜められた。

1944年（昭和19）の旱魃のときは、僕は毎日自転車で行って、バケツで田んぼに水をかいだものです。池一つ、かいちゃった（掻



い出したこともある。

次世代へつなげるには

こんな話は、僕は正直言っ
て、恥ずかしい話だと思っ
てる。貧乏人の代表みたいな話だ。でも、水にはさんざん苦労しておる。

問題は、こういう苦労をしない
で育った世代に、水の大切さをど
うやって伝えていくか。

これは夜通しバルブを開けてい
たな、という例は散見します。私
は閉めて回りますがね。もつた
ないなあ、と思うことがあります。

田んぼに張った水がしみ出てく
る分もありますよ。土地改良で床
の部分は流れちゃっているから、
水が漏れる田んぼもある。昔は畦
塗りといって、土を練って畦をす
ーっと塗ったもんですよ。今は、
もうそんなことは「やってくれ」
と頼んだってやってくれんですよ。
今の人にそういうことまでも求
めるということは無理だけれど、
水を大事に使うということは、何
が何でも伝えなくちゃいかん。

それと、これは一つの例として
言うんだけど、自民党も民主党
も農業のために良い政策を考
えてくれているが、仮にそれが完全
に実施されたとしても、この辺りじ
ゃあ農業後継者なんていうものは、

まずは生まれませんよ。

僕らがやってきた「きつい、汚

い、危険」だといわれたあの時代
には、きちっとやったら農業は儲

かった。しかし、その悪いイメー
ジがだんだん一人歩きしてしまっ
た。愛知県には産業はいくらでも
ある。農業なんかやらなくたって
同じ収入が得られるじゃないか、

という気運があります。だから僕
の経験から眺めるに、所得が補償
されるようになって後継者は一
人も出てきません。それが今の現
実だと思います。

だから、もうちょっと農業のイ
メージをなんとかしないとね。こ
れは難しいことだと思っ
ね。私は土地改良だけではなしに農協もや
ってききましたから、こんなことは
言いたくないけれど、本当にそこ
が問題だと思います。

通水直後から工業用地の開発が
進み、用途転用がされました。正
直言って、「大事な水がきて、こ
んなに素晴らしい農業ができるよ
うになったのに、なんで」と思っ
た。1964年(昭和39)、196

8年(昭和43)、1972年(昭和47
と3回にわたって用途転用があっ
たときに、これも時代の流れと諦
めたというか、流されたというか、
負けてったというかわからんけれ
ど、自分で自分を慰めていったと
いうのが、正直な気持ちです。

水が平等にくるといふこと

既に二期事業の話も出ていて、
上流の人の気持ちを考えれば、知
多半島の犠牲になって、「俺ん所
の水が取られた」という気持ちも
あったらどうと思っ
ますよ。

また小牧や春日井は、まだまだ
ましな地形で知多半島ほど金をか
けなくても、水が手当てできるの
に、とも思っていたと思っ
ますよ。そういう地域も巻き込んで、平等
にいこうとする。それを知多の人
間は頭を下げて感謝せにやらん
て。

だから土地改良というものは、
どが得でどが損というのでは
なしに、みんな平等に水がくるこ
とが有り難いんだという意識を持
たないと、できるもんじゃない。

愛知用水の中でも、上流、下流
という意識があるんです。細かい
ことを言えば、小さな支線の中
にも上下流の関係がある。そうい
うことに平等性を持たせるために、
国が金を入れ、県が金を入れてく
れるのだ。農家が負担するのも、
そういう気持ちからです。それで
も上流の人と下流とでは恩恵が違
う。だから下流は、本当に感謝せ
ないかんよ。

